

Pride and Prejudice について

真 田 時 蔵

Jane Austen の研究家として知られている John Halperin は、彼の *The Life of Jane Austen* のなかで、*Pride and Prejudice* を評してつぎのように述べている。

It can hardly be disputed that *Pride and Prejudice* is one of the greatest novels in any language. It is about the difference between true and false moral values. It is about the difference between the appearance of things, the ways in which they may be perceived, and their true reality, the ways in which they exist. Like all great literature, it seeks to identify what is true and expose what is false — and to separate the two from one another. It accomplishes these things brilliantly.

Critics have tended to agree with much of this, though in recent years *Pride and Prejudice* has been relegated by some of them to an inferior position among the six novels. This may be a mistake; it is probably the best of Jane Austen's books, for all the changes in modern taste. It has many virtues beyond those already mentioned. It is not only a very funny novel, it is also highly suspenseful — elements not always noticed by its readers.

『高慢と偏見』を Austen の作品のなかで最もすぐれた作品として評価しているのは、John Halperin だけではない。W.S. Maugham も世界の十大小説のリストを作る依頼をうけて選んだ十大小説のなかに『高慢と偏見』を含め、つぎのようにこの小説を紹介している。

私自身としては、『高慢と偏見』は全体として見ると、あらゆる小説の中で最も申し分のない小説であると思う。この作品は、最初の文章を読んだだけで、直ちに愉快的気持になる。「独身で相当の財産を持つ

ている者なら、妻をもつ必要を感じているに違いないというのは、あまねく認められている真理である。」この文章で作品全体の調子が定まり、初めに感じた愉快的な気持をそのまま持ちつづけられるので、最後のページにきて本をおくのが残り惜しく思われる。

小説家は小説家としてすぐれていれば十分であるといい、小説の目的は、教えることにあるのではなく、すべての芸術の目的同様、楽しませることにあるといいきる Maughamらしい評である。Maughamが引用している『高慢と偏見』の冒頭の部分につづく Mr. Bennet と Mrs. Bennet の会話は秀逸である。Percy Lubbock が小説の技法として、「まず最初に、劇的な出来事、正しくいえば、場面——これがいちばん重要なことは明らかだ」と述べているが、Austenはこの小説の書き出しの部分で、Bennet 夫妻の結婚生活の様子を浮き彫りにさせる場面設定に、非凡なところをまずみせている。ふたりには5人の嫁入り前の娘があり、近隣に若い裕福な紳士が移り住むことになるいきさつが、娘の将来の結婚のことで頭が一杯になっている Mrs. Bennet によって語られる。また同時に、愚かな妻と心が通わなくなって、ちぐはぐな日常を過ごしている夫 Mr. Bennet の描写には、Austenらしさがよく出ている。独身で相当の財産を持っていると噂された Bingley は、Mrs. Bennet の思惑どおり長女 Jane に好意をもち、「ああ、あんな美しい女性を見たことがない！」と友人 Darcy に話すほどになる。また Jane も Bingley について「あの方は、本当に青年らしい方だわ。分別もあり、快活で、元気がよくて。わたし、あのように立派な振る舞いをなさる方を見たことがないわ——とても気さくで、申し分のない育ちの良さ！」と妹 Elizabeth に感嘆して語る。このようなストーリーの展開は、当時流行していた感傷的なロマンティックな小説の展開に似ているようにみえる。だが、この小説ではヒロインがさまざまな障害と試練を乗り越えて、結婚に至るというようなストーリーに重点があるのではない。Margaret Kennedy もいう通り、「ストーリー自体は18世紀のありふれた小説のプロット」になっているが、この小説で注目すべきことは結婚選択の問題である。この小説で描かれる結婚選択は、Bennet家の長女 Jane と Mr. Bingley、次女 Elizabeth と Mr. Darcy、末娘の Lydia と Mr. Wickham、そして

Charlotte Lucas と Mr. Collins の 4 組の結婚選択である。

これらの結婚選択を照らし出す光をなげかけているのは、Bennet 夫妻の結婚生活である。S.T. Warner は「ベネット夫人はかくれもなき大馬鹿であり、ベネット氏は気むずかしい馬鹿である」ときめつけているが、E.M. Forster が指摘しているように、Austen は作中人物にレッテルを貼りつけているようにみえるが、作中人物がそのレッテルに束縛されてはいない。つまり、Jenni Calder の言葉を借りれば、「彼女の描くヒロインは嫁ぐことになるが、ほかの小説にみられないほど明確に、そして個人的に性格創造がなされているのである。」この小説全体に喜劇的な彩りをそえる Mrs. Bennet は、第 1 章の最後の一節でつぎのように描かれる。

23 年の経験では、彼の妻は、まだ十分に夫の気性のみこむことができなかつた。彼女の心の方が見抜きやすかつた。彼女は、貧弱な理解力と乏しい知識しかない、移り気な性質の女性であつた。……彼女の一生の仕事は、娘たちを結婚させること、一生の楽しみは、訪問と世間話であつた。

わずか 3 頁たらずの第 1 章で、Austen は独特の才知とユーモアで、この小説の主題にふさわしい雰囲気醸し出している。これはまぎれもなく当時の紳士階級の一面をも写し出している。ジェントルマンは持参金目当てでなくても、紳士階級としての社会的身分・財産とも釣り合いのとれる格好のレディーの中から結婚相手を選ぶのが慣わしだった。レディーも生まれ育った生活水準は落とさないように、夫となる男性の年収や生活規模は重要な判断基準となっていた。第 1 章では 'fortune', 'property', 'possession' といった mercenary terms が 11 度用いられている。Mrs. Bennet はネザーフィールド邸に移ってくる Mr. Bingley の年収が 4,000 ポンドであることを 2 度口にする。夫の Mr. Bennet の財産は、年収 2,000 ポンドの地所だけで、しかも Bennet 家には男子がいないため、遠縁にあたる Mr. Collins に限定相続されることになっている。こうした事情から、Bingley は Mrs. Bennet にとって、自分の娘たちの 1 人と結婚するのに申し分のない独身男性に思われるのである。彼女に

とって、娘の結婚相手としての Bingley の人間的資質など二の次のことなのである。彼女のように結婚選択において、mercenary な判断基準を重要視することは、めずらしいことではなかった。そうした現実をふまえて、多くのシンデレラ物語が書かれたのである。Austen は当時流行の現実離れしたシンデレラ物語が、リアリズムに欠けていることに不満を感じた。したがって、彼女の小説はそのような小説に対する文学的風刺となった。彼女の小説のストーリーは若い女性が結婚相手を見つけるに至るいきさつに限られていたが、重要なことは、彼女がそうしたストーリーの展開をとおして示した主題である。『高慢と偏見』にその主題が十分うかがわれる。それは結婚選択の基準である。

『高慢と偏見』では、大まかにいって人間的資質を重視する人物、mercenary な動機をもっている人物、そしてそのいずれでもない無思慮な人物が描かれる。Mrs. Bennet は、娘たちを資産家に嫁がせたいと望んではいるが、思慮のなさを随所にみせて、読者の嘲笑を買うことになる。第 20 章では、Elizabeth が賢明にも Collins の結婚の申し込みを断ると、夫に「あなたからリジーに話してやってください。どうしてもあの方と結婚しなければいけない、とおっしゃってください¹¹」といい、目論見どうりにならないと、Elizabeth に「わたしは今日から縁を切りますよ。……わたしは親不孝な子と話をしたって、なんの面白いこともないんだから¹²」といって、Elizabeth を驚かせる。また、「かなり莫大な額にのぼる賭博の借金¹³」などで身のおきどころのなくなった Wickham が Lydia と駆け落ち騒ぎを起こしたあと、事態をつくろうためにふたりが結婚することになると、Mrs. Bennet は「まあ、わたし、本当にうれしいよ！ もうじき、娘が 1 人結婚するんだもの。ウィッカム夫人！ なんていいひびきだこと¹⁴！」といって手ばなして喜ぶ。

Ernest A. Baker は *The History of the English Novel* のなかで「自己認識、自己抑制、自己尊重の達成が、常にジェイン・オースティンの作品の結論である¹⁵」と指摘しているが、『高慢と偏見』では作者 Austen の分身的登場人物は Elizabeth である。したがって第 42 章の冒頭の一節は、Mr. Bennet と Mrs. Bennet の結婚選択が失敗であったことを端的に示している。

もしエリザベスの意見が、自分の家族の生活をもとにしてつくられたものだったら、彼女は、夫婦生活の幸福とか、家庭の楽しみとかいうものについて、あまり愉快的な未来像を描くことはできなかったであろう。彼女の父は、若さと美しさのとりことなり、また若さと美しさが普通に与えるところのあのうわべのよい感じに心をうばわれて、ひとりの女性と結婚したのであったが、その女性は理解力が弱く心が偏狭なので、結婚すると間もなく、その女性に対する真の愛情はおわりを告げたのであった。尊敬と好意と信頼は永久に消え、家庭の幸福という考えはすっかりくつがえされた。

また、Elizabeth は「父親の態度が夫として不都合であることに盲目ではなかった。」父親が「なげやりであり」、¹⁷「自然にいつもの怠惰にもどっていき」¹⁸人間であることを知っていた。人間がしばしばみせる愚かさ、¹⁹勿体ぶった見せかけ、偽善を鋭く見抜くことのできた Austen は、そうした人間の弱さに、心を痛めることはあってもユーモアをまじえて描いたところに、彼女のモラリスト²⁰としての一面をみることができる。

Mrs. Bennet が結婚の条件として男性の収入を重視していたことについては、すでに述べたが、彼女と同様に mercenary な動機から結婚選択を考えている登場人物は Charlotte と Wickham である。Charlotte は極めて打算的な女性である。Darcy の高慢が Elizabeth との間で話題になったときにも、「あの方の高慢は、ほかの人の高慢とちがって、わたしにはそう気にさわりませんわ。ちゃんと理由があるんですもの。……誰だって、あれだけ立派な青年で、家柄がよく財産があって、何から何まで心のままなら、気位が高くなるのは、ちっとも不思議ではありませんもの。……あの方には高慢になる権利があるんですわ」といってはばからない。また、愛情についても「女が自分の愛情を、世間に感づかれないと同じように、当の相手にまで感づかれないなら、相手の心を自分のものにする機会を逃がしてしまうことになるかもしれないわ……女はやはり実際に感じている以上の愛情を見せるようにした方がいいのね」²¹と Elizabeth に説いている。さらに彼女は、「結婚後の幸福は、まったく運次第ですもの」²²ともいう。Mr. Collins は結婚相手として、まずベネット家の長女 Jane を考えるが、Mrs. Bennet の期待に沿うように、次女の

Elizabeth に結婚の申し込みをして断られる。そこでつぎに Charlotte に結婚を申し込む。Charlotte は Collins が利口でも感じのいい人でもなく、いっしょにいても退屈だと思いつつ、「男とか夫婦生活とかいうことには重きをおかないで、ただ結婚ということが、常に自分の目的である。……結婚が唯一の恥ずかしくない食べていく道である²⁴」と考える。したがって、Charlotte が Collins と結婚すると聞いて驚く Elizabeth に彼女は、「わたしはロマンティックな女じゃないわ……コリンズさんの性格や親類関係や身分を考えると、あの人と結婚すれば、世間の人たちに結婚生活を自慢するくらいの仕合わせは、きっとえられると思っているのよ²⁵」といて自己満足している。Collins はうぬぼれの強い、愚かな人間である。彼は庇護者 Lady Catherine de Bourgh の意向に従うことを生きがいにしている牧師である。Lady Catherine のすすめに従ってなんとしても結婚しなければと思い、先ずベネット家の娘たちのことを思い出し、ベネット家を訪問する。訪問に先だって Mr. Bennet に手紙を出す。訪問の目的を伝える文面には Collins の愚鈍さが明瞭に示されている。彼の手紙を読んだ Elizabeth は「これでも利口な人なのでしょうか²⁶」と感想をもらす。Ian Watt が『高慢と偏見』では、ストーリーは実質的にはヒロインであるエリザベス・ベネットの視点から語られている²⁷と述べ、Elizabeth が dispassionate analyst の役割を担っていると指摘しているが、より重要なことは、彼女が Austen の結婚選択の適切な基準を明示していることである。

Elizabeth が予想したとおり、Collins は愚かな振る舞いをつぎつぎと見せる。Mr. Bennet に、「あなたは、お上手におべっかをお使いになる才能をもっておられて仕合わせです。ときに、そうした嬉しがらせるいんぎんさは、その場の衝動から発するのですか、それとも前もって研究をつままれる結果なのですか²⁸？」と皮肉をいわれても、皮肉がわからず勿体ぶって、愚直に応じている。彼は Mr. Bennet の予想どおり、愚かな人間であることがわかる。彼の結婚選択はこっけい極まりないものとなる。ベネット家についた最初の晩には、Jane が長女でもあるので、「彼の意中の人²⁹」となる。しかし、次の朝 Mrs. Bennet から彼女の勝手な思いこみで Jane は「もうすぐ婚約ができそうである³⁰」と聞かされると、結婚相手として次女の Elizabeth を選ぶ。このいきさつを作者 Austen は辛らつ

に描写している。

コリンズ氏は、ジェインをエリザベスにかえれば、それですむのであった——そしてそれはすぐに行われた——ベネット夫人が火をかきまわしている間に実行された。³¹

Elizabeth は必死になって、Collins の結婚計画を思いとどませようとするが、Collins は、「牧師はどこまでも謙遜な態度をまもっていなければなりません……僕の方が教育と日頃の研究のおかげで、なにが正しいかを判断するのに適していると思います」といい、さらに「僕はこのお宅に入った時に、もうあなたを将来の伴侶としてえらんだのです」と嘘をいう。Elizabeth が重ねて彼の申し込みを断ると、「若い女性は、はじめて男性に求愛されると、心の中で受け入れようと思っても、一応は拒絶するのが普通なんです。時には、二度も三度も拒絶することがあるものです³⁴」とひとり心の中で勝手に解釈するのではなく、Elizabeth に向ってそういうのである。そして、「あなたに、なおよく考えていただきたいことは、なるほどあなたには、いろいろ魅力はおありですが、今後二度と結婚の申し込みをうけることがあるとは限っていないということです³⁵」といい、Elizabeth が断っているのは、「上品な女性³⁶」がよくつかう手をつかって、彼の気をもたせ、恋情をつのらせようという意図からだ、と Elizabeth にいう。Collins は主観的には、自分は教養があり社会的な常識をわきまえ、礼儀正しい人間であると思いこんでいる。こうした場面で Austen は当時広く読まれていた感傷的小説に登場する人物や、描かれる出来事がいかに現実離れしているものであるかを際立たせるために、巧みにパロディを描いてみせたのである。

Wickham と Lydia の結婚選択も、この作品に特別の彩りをそえている。青年士官 Wickham は、「生活は怠惰で浪費的生活³⁷」をおくり、賭博にのめりこみ、返済できないほどの借金をつくる。彼は財産目当の結婚を目論んでいたのであるが、そうした下心を実現するだけの計画性をもって生活することもできない人物である。したがって彼は、mercenary な動機で結婚した Charlotte と同類であるが、彼女に劣る人間である。

この小説のプロットの展開という観点からみると、Wickham は第 16

章で「ウィッカム氏は、あらゆる女性に振りかえって見られる幸福な男性³⁸」で、Elizabeth もそうした女性のひとりとしてであり、彼のそばにいただけで仕合わせを感じるのである。その頃の Elizabeth と Wickham の関係の描き方は、Wickham を Darcy と対照的人物として描くことで、その後の三人の関係を明らかにしていく状線となっている。Edwin Muir は *The Structure of the Novel* のなかで、『高慢と偏見』のプロットについてつぎのように述べている。

『高慢と偏見』では、状況の変化がかならず作中人物の変化をとまなうという具合になっているが、まず重要なのはやはり事態の進行、いかにいけば、プロットが真実味のある適切なものだという点である。この事態の進行は、二つの面で必然的なものになっている。つまり作中人物の性格の展開をあとづけているかぎりでは、内面的な真実味がふくまれており、全体の動きの正しい発展である限りでは、外面的な真実性がある。というよりは劇的小説では、こうした真実性の内外両面³⁹の一致が、ほかの種類の小説には見られない完全さを示すのである。

Wickham の魅力にひかれていた Elizabeth は、Wickham の巧みな嘘をすべて信じてしまうことになる。したがって、初めて Darcy に会ったときの印象だけで、彼に対して偏見をもってしまっていた Elizabeth は、Wickham が Darcy について「あの男の場合は、真価以上に評価されないことは、まれにしかないのです。世間はあの男の財産と地位に眼をくらまされるか、それともあの高飛車な堂々たる態度⁴⁰におそれをなすのか、あの男の望み通りにしか、あの男を見ないのです」と聞かされ、Elizabeth は納得してしまう。しかし、この第 16 章の場面では、さらに Wickham は Darcy を中傷する嘘でかためた作り話を、Elizabeth の耳に入れようとするが、彼女は話がますます佳境にはいつてきたと思いつつも、それ以上深入りしてたずねようとはしない。Elizabeth の人柄を暗示するためのオースティンの巧みな描写である。

Wickham と駈け落ち騒ぎをひきおこし、彼と結婚する Lydia は、母親譲りの性格をみせる人物である。Lydia のブライトン行きをやめさせようとして、Elizabeth は父親に Lydia のことをつぎのようにいう。「今

のように男性のあとを追いまわすのは、あのひとがいつまでもやっていることではないことを、お教えにならないと、リディアはすぐに手におえなくなりますよ。性格がそのまま固まって、16才で、自分も家族も世間のもの笑いになるような、手のつけようのない浮気娘になってしまいますわ……若くてちょっと顔立ちがいいというほかはなんの取柄もない、心が無知でからっぽで、ちやほやされたいばかりに、世間の嘲りを招いてもちっとも防ぐこともできないような。」だが、Lydia がブライトンへ行きたがっていることに Elizabeth が反対するのを聞いて、Mrs. Bennet は彼女自身が25年前に同様の経験をしていたので、Lydia と「いっしょになって悲しみ、⁴²未熟な母親ぶりを露呈する。Lydia がブライトンへ行くことを許されると、Mrs. Bennet と Lydia は旅立つ日まで、「ほとんどやすみなく有頂天に」⁴³なる。この場面で Elizabeth が用いている“the business of her life”という言葉は、この小説の第1章の末尾で Mrs. Bennet についていわれている ‘The business of her life was to get her daughters married’ という言葉と共鳴して、喜劇的効果を高めている。Elizabeth からは Mrs. Bennet は ‘a mother incapable of exertion’⁴⁴ と見なされていることも、ここでは見逃がしてはならない。

長女 Jane が16才になってから、Mrs. Bennet の「願望の第1目的となっていたのは」⁴⁵娘たちの結婚であった。だが、最初に結婚することになるのは末娘の Lydia である。このようなストーリーの設定にも Austen の皮肉がこめられている。Mrs Bennet は結婚するふたりの収入のことなど考えずに、非現実的なことを夢想する。また、Lydia が駆け落ち騒ぎをひきおこし、近所に知れわたっているのに、Lydia の結婚を近所に披露することにも喜ぶ。作者の結婚選択の基準を示す Elizabeth は、Wickham がロングボーンへ来て「結婚披露する計画に同意するということを意外なこと」⁴⁶と思うのである。Elizabeth は Lydia の気持を思いやって、彼女の妹がどんなにつらい思いをしているだろうと想像しているのだが、Lydia は「相変わらずのリディアであって——野放図で、ずうずうしく、わきまえがなく、さわがしく、恐れを知らない」⁴⁷。Wickham についても Elizabeth は、「まさか彼がこれほど厚かましい人間だとは思わなかった」⁴⁸のである。Elizabeth のほうが赤面してしまう。Lydia も Mrs. Bennet も、結婚が Wickham にとって危機的な状況をのがれる好都

合な方便にすぎないことを知らない。したがって、このふたりの結婚選択が失敗であることを Austen は十分明らかにしている。最後の章で Austen は Wickham と Lydia の結婚生活についてごく簡単に、「妻に対する夫の愛情は、まもなく衰えて無関心にかわった。妻の愛情はすこしは長つづきした」と、このふたりの結婚生活の先行きを暗示している。

つぎに Jane と Bingley の結婚についてみると、このふたりの結婚選択には当時流行していたメロドラマとか感傷的なロマンスの雰囲気を感じられる。この作品の冒頭の部分で噂される Bingley は評判通りの富豪であり、だれにでも好印象を与える青年として登場する。またすでに引用したように (36 頁)、Jane とはじめて会ったときには「ああ、あんな美しい女性を見たことがない!」と Bingley は率直に Darcy に語っている。Jane が Bingley の印象について「あのよう立派な振る舞いをなさる方を見たことがないわ⁵⁰」、と感嘆すると Elizabeth も「それにハンサムだわ。できれば、青年はああいうハンサムな人だといいわ。これであの方は完璧だわ⁵¹」と Jane の気持に合わせて、Bingley に対して賛辞をおしまないが、そのすぐあとで Elizabeth は Jane につぎのようにいう。

あら、あなたは、大体が、誰れ彼れの区別なく好きになりすぎるわ。あなたは、人の欠点を見ないんだから……あなたほど分別のあるひとが、どうして他人のする愚かなことや馬鹿げたことが、ほんとうに目にはいらぬ⁵²んでしょう。

この小説では当時流行していた感傷的小説が、いかに現実離れしたものであるかを際立たせるために Jane と Bingley が描かれている。

Jane はそうしたロマンスのヒロインのように、この小説で最も美しい気立ての優しい人物として描かれる。Jane は決して他の人々を批判的にみたり、いったりすることのない人物として描かれ、Lydia のように軽はずみな振る舞いをみせることもない。彼女が恋する Bingley も、Jane の恋人にふさわしい人物である。このふたりはそれぞれ自分の愛情を自覚しているが、積極的に相手にそれを伝えることをちゅうちょしているところがある。Elizabeth からみると Jane は、「かつてかりそめの恋さえしたことがなかったから、彼女の恋情は初恋のあらゆる情熱をもっていた

し、そして年齢と気質から、初恋がしばしば誇りとする以上のたしかさをもって⁵³いた」と考えられる。Bingley も Jane 同様内気なところがあった、Jane に自分の気持を素直に告白できないまま、しばらくネザーフィールド荘園を離れることになる。Darcy はのちに手紙のなかで、Elizabeth に Bingley を Jane から引き離したいきさつをつぎのように説明している。

わたくしがお姉さまが無関心でいるものと信じたかったのは事実です……わたくしはお姉さまが無関心であってくれればいいと思ったが故に、そう信じたのでありません。……また、わたくしは前にも、これは大へん不幸な縁組だと思って、友人をこの縁組からまもってやろうという気持になったのですが、そういう気持がいつそう強くなったのです。……ビングリーはそれまでは、あなたのお姉さまが、彼ほど熱烈でなくとも、誠実な愛慕の情で彼の愛情にむくいてくれるものと信じていました。けれどもビングリーは生まれつき内気な男で、自分の判断よりもわたくしの判断を頼りにしていました。⁵⁴

このような Jane と Bingley の結婚選択には、すでに述べたように当時流行のロマンスに登場する人物に似たところが感じられるのである。

『高慢と偏見』では 4 組の結婚が成立するのであるが、そのうち Charlotte と Lydia の結婚選択は厳しい風刺の対象となっている。Austen は、まず冒頭のところで Mr. Bennet と Mrs. Bennet の結婚生活を読者に印象づける。ついで、Collins と Charlotte、Wickham と Lydia、Mr. Bingley と Jane の 3 組の結婚選択を描く。それらの結婚選択は、Elizabeth と Darcy の結婚選択の特質を際立たせるために、作者 Austen が巧みに仕組んだプロットの重要な要素となっている。⁵⁵つまり、この小説は、Elizabeth と Darcy を中心にすえた劇的小説なのである。Edwin Muir は劇的小説についてつぎのように述べている。

劇的小説では作中人物とプロットとの間隙が消え失せます。作中人物の方がプロットの仕組の一部だということでもなければ、プロットが単に作中人物を入れるためのお粗末な枠組にすぎないということもあ

りません。そうではなくて、プロットと作中人物の両者が分ち難く結びついているのです。作中人物のある性質が全体の動きを決定していく一方、動きの方が人物をじょじょに変化させていき、かくしてすべてが終局へとおし進められていくのです。⁵⁶

Muir が指摘しているように、『高慢と偏見』のプロットが行動小説と異なる点は、その緊密な内面的な因果関係にある。⁵⁷ Elizabeth がはじめ Darcy に対してよい印象をもたなかったのは、ふたりが出会った状況からやむをえないことであった。舞踏会で Bingley が Jane とはじめて会ったときに、「ああ、あんな美しい女性は、見たことがない！」と Darcy に話したのは対照的に、Bingley が Darcy に Jane の妹 Elizabeth と踊るようにすすめる場面は、この小説の展開の上では重要な意味をもっている。

「……でも、あの妹のひとりで、君のすぐうしろに腰かけている女性も、とてもきれいだよ。それに、とても気心もよさそうだよ。僕の相手にたのんで、一つ君を紹介してもらってもいいだろう」

「どれかね？」そういって彼はふりむいて、ちょっとエリザベスを見ていたが、彼女と視線があうと、眼をそらして冷やかにいった。「がまんできるけど、僕がひかれるほどの美人じゃないね。それに今のところ、僕は、ほかの男の見向きもしないような女性の堤灯もちをする気にはなれないね」⁵⁸

こういって Darcy が立ち去ったあと、彼の話をそばで偶然耳にした Elizabeth は、Darcy に対して当然好感をもてない。「けれどもエリザベスは大はしゃぎで、友だちの間にその話をふれまわる。というのは、彼女は、ちょっとでもおかしなことがあると、うれしくなる、快活なたわむれ好きな性質をもっていたからである」。⁵⁹ Austen はそのあと、Elizabeth のすぐれた資質をじょじょに描きだすが、ここでは 'a lively, playful disposition, which delighted in any thing ridiculous' であることを示し、同時に Elizabeth の快活で屈託のない明るさを強調しているだけでなく、聡明な女性であることも示している。伝統的なヒロイン像

から考えると、Janeの方がそれにふさわしいのだが、AustenはJaneのような美人をヒロインとして設定しなかった。Andrew H. Wrightが指摘しているように、⁶⁰ いわば「善」と「悪」とが複雑に混じり合った人物である人間像としてElizabethを描くことで、彼女をヒロインとして設定したのである。

Elizabethは感傷的なロマンスのヒロイン像と異なって、合理的な判断力、冷静に自己の感情の分析力を持ち、鋭い人間観察力に基づく、表現力も発揮できる人物である。それらは作者Austenが考える結婚選択にあたっての主要な価値基準のよりどころである。適切な判断基準をもつElizabethもWickhamに会って、はじめのうちは彼の美貌と魅力的な振る舞いに目がくらみ、彼の嘘や信頼できない人間であることを見やぶることもできない。またDarcyの実像を容易に見ることができず、彼の人間的な真価を見抜くこともできない。

Darcyも最初から、高慢さと人々にうちとけない振る舞いによって誤解される。Bingleyについての「利口で快活で元気がよくて、あたし、あんな立派な振る舞いをなさる方を見たことないわ、——とても気さくで、申し分のない育ちの良さ！」というJaneの言葉は、いくぶん割引きして見なければならぬとしても、Bingleyは‘happy manners’と‘perfect good breeding’をもっていることはたしかで、彼の快活さは皆が認めている。これに対しDarcyはロングボーンに登場するとすぐ、「お高くとまっていて、人々を見下し、いっしょになって楽しまない」、「世界中で最も高慢な不愉快な男である」とみなされる。だが、最初はElizabethに魅力を感じなかったDarcyが、やがてElizabethの「黒い眼の美しい表情が顔全体をなみなみならず聡明にみせていることに、彼は気づきはじめる……その軽快で飄軽な様子に心をひかれる」⁶³ようになる。DarcyはElizabethに心ひかれていくうちに内面的な変化を経験する。そしてElizabethに対しても「高慢は心が本当にすぐれていれば、いつでも上手におさえつけていけるものである」というようになる。ElizabethもWickhamには好印象をもっていたため、Wickhamが過去においてDarcyを騙し、駆け落ち騒ぎを引きおこしてDarcyに寛大な扱いをうけていた事実を知らぬまま、Wickhamの巧みな作り話を鵜呑みにしてしまう。さらに、DarcyはJaneをBingleyから引き離し、Bingleyと彼の妹を結婚させよ

うとしていると思ひこんでしまう。しかし、Elizabeth は Darcy の求婚、そして真摯に彼女を愛している心境を吐露した手紙を渡され、思いもよらぬことなので驚く。さらに Wickham と Darcy の関係の真相を知って、Elizabeth の Darcy への評価はじょじょに変化をみせる。Elizabeth が一旦結婚の申し込みを断ったあと、Darcy の手紙を読んで、自分が大きな誤解をしていたことに気づく。Edwin Muir の指摘どおり、その時点が、アリストテレスのいわゆるプロットの中心をなす。つまり Darcy 自身が冷静に自分自身を見つめなおし、つぎのように Elizabeth にいう。

わたくしはこれまで利己主義者でした。……子供のとき正しいことは教えられました、自分の気質をなおすことは教えられませんでした。いろいろ立派な道義は授けられましたが、高慢と自惚れた気持で、それに従ったまでです。⁶⁵

このように Darcy から率直にいわれる前に、Elizabeth は彼に対していっていた印象が偏見によるものであることを自覚している。彼女は、Jane と Bingley を引き離そうとした理由についても、また自分の母親の親戚の社会的身分の低さや、両親や Lydia の愚かしさ、そして Jane の消極的な態度が、Bingley に対する真の愛情の欠如の表われだと誤解されたこと等について冷静に理解する。Elizabeth の Darcy に対する評価の変化は、ダーシー家のペンバリー訪問も大きな契機となっている。ペムバリーは、ロングボーン、ローズィングズ、ブライトンとは対照的な場所である。ペムバリーは世俗的なものに汚れていない場所として描かれる。

やがてかなり高い丘の頂きに出たが、森はもうつきて、谷の向うに建っているペムバリー邸が、たちまち眼にはいつてきた。……大きな美しい石造の建物で、高い地面の上に形よく建てられ、樹木のうっそうと茂った高い丘を背負っていた。建物の前のところで、自然の威容をそなえた一筋の流れがぐっと大きくひろがっていたが、すこしも人工をくわえたあとが見えなかった。兩岸は、形にこだわることもなく、わるく装飾をほどこされてもいなかった。エリザベスは喜んだ。彼女

は今までに、これほど自然が生かされ、これほど自然の美がへたな趣味でこわされていない場所を見たこともなかった。⁶⁷

Elizabethはペムバリー邸の部屋に入って、「ダーシーの趣味に感心しながら、……ローズィングズの家具よりは華美ではなく、本当の上品さがある」⁶⁸ことに気づく。Austenはペムバリー邸の外観とそれを取りまく自然とペムバリー邸の内部を眺め、「この家で、私は主婦になっていたかもしれないんだわ！……お客として見物して歩くのではなく⁶⁹」とElizabethが空想する様子を描いているが、この描写ではLydiaとElizabethの性格の違いを鮮明にしている。さらに、家政婦のMrs. ReynoldsからDarcyの人柄をしのばせる話を聞くことで、彼女はDarcyに対していただいていた先入観をあらためることができるようになる。その後Lady CatherineがDarcyとElizabethの結婚を阻止するために、Elizabethと会い、Darcyの家柄、縁故関係、資産を考えれば当然婚約などできないはずだと高飛車な態度でElizabethを説得しようとする。だが、Elizabethは少しも動ぜず、「あの方は紳士です。わたしも紳士の娘です。それだけは同等ですから⁷⁰」といい、さらに「義務も、体面も、恩義も、今の場合は、わたしになんにも要求する権利はありません。わたしがダーシーさんと結婚したからといって、どの原則も破られるようなことにはなりません⁷¹」と断然と夫人の要求をはねのける。

またElizabethは、Darcyの「わたしはこれまで利己主義者でした」という言葉に呼応するかのようになり、「わたしはとても利己的な人間なので⁷²」といい、Darcyに対していただいていた偏見がどのようにしてなくなっていったかを説明する。

こうしてElizabethとDarcyは互いに自己認識を深め、社会的地位に関係なく、その人格ゆえに尊敬することになる。山脇百合子氏はAustenが「作品のなかで窮極にもとめていたもの——それは人間の〈自己認識〉ということであったと思う⁷³」と述べている。また、Edwin MuirはElizabethとDarcyの変化についてつぎのように指摘している。

ふたりともはっきりした性格の持主だから、ふたりがお互いにはじめから反発しあうのも、もっともである。エリザベスの方でダーシー

を冷淡で、傲慢で、執念深い男と思ひこむのは、いかにも卒直な性質にふさわしいし、あとになって自分が間違っていたことを認めて、意見を変えろというのも、彼女らしい。こうしてこの小説全体の動きは、あくまで自己に忠実な振る舞いに終始する作中人物たちによって、生み出されていくのである。事件を必然の法則のように進行させているのは、まさに彼らの性格の一貫性である。そしてまた相つぐ事件を通じて作中人物は、じょじょにその性格を發揮していくのである。

Marvin Mudrick が『高慢と偏見』において初めてジェイン・オースティンは、彼女自身の現実世界に対する態度を自分の描くヒロインに共有させている⁷⁵と指摘しているように、Elizabeth は Charlotte や Collins などとは著しく異なる結婚選択をするヒロインである。他の人物の選択は、理性的で慎重な選択ではなく、なんらかの形で偶然によるところが大きい。

Austen の結婚選択の判断基準は、Elizabeth と Darcy によって明らかにされるが、他の作中人物によっても補足的に示される。結婚する当事者は、まず'sensible'でなければならない(作中 sensible は 24 度 'insensible' は 4 度用いられている)。Mr. Bennet は「本当に夫に尊敬するのでなければ、幸福になれない⁷⁶」と Elizabeth に忠告し、Jane は「愛のない結婚だけはしないでね⁷⁷」という。Austen は姪に対して「愛なくして結ばれる悲惨はたえようがない⁷⁸」と語ったと伝えられるが、その真意が Jane の言葉に仮託されているに違いない。愛情による結婚をするためには、人は自己認識を深め、一時的な感情に動かされることのない洗練された感性をもち('civil' と 'civility' の使用例からうがわれる)、誠実に時間をかけて、じょじょに愛情を育む努力すべきことを、『高慢と偏見』で Austen はみごとに描いた。Richardson 流に、もしこの作品に強いて副題を添えろとすれば 'sense rewarded' となるであろう。したがってこの作品は educational novel⁷⁹ の要素をもっていることは否定できない。この作品に批判的な作家もいた。たとえば Charlotte Brontë はつぎのように批評している。

あなたは どうして ミス・オースティン が お好きなのでしょう。わた

くしにはよくわかりません。……平凡な顔をただ正確に写しただけの肖像画。きちんと柵で囲い、よく手入れされた庭があって、ふちどりも整っていて、美しい花が咲いている。しかし明るい生き生きとしたものの姿は何ひとつない。郊外の広々とした風景はなく、新鮮な空気もなく、青々とした丘も、美しい小川もない。彼女の描く紳士淑女と一緒に、優雅であるけれど息のつまりそうな家に住む気にはとてもなれません。ミス・オースティンの人間観察はいらだちを感じさせます。……詩をもたない大芸術家など、存在しうるのでしょうか。

Austen の描いた世界はたしかに狭い世界であった。そして彼女の描くストーリーは結婚相手の選択のいきさつに限られていた。しかし彼女は Fielding から「喜劇的散文叙事詩」の手法を、そして Richardson から心理描写の手法を受け継ぎ、美点と愚かしさを合わせもつ現実に生きる人間の肖像画を精緻にユーモアをもって描くことに小説家としての冴えをみせた。また、彼女の小説を読むとき、見落してはならないことは、すでに述べたモラリストとしての彼女の姿勢である。F.R.Leavis もモラリストとしての Austen についてつぎのように述べている。

オースティンはすぐれた頭脳と真摯な心情の持ち主であったから、その芸術作品において道徳的緊張を十分意識し、これを人生のためにどのように処理すべきかを学ぼうと努めつつ、これを個人を離れた普遍的なものにすることが出来ているのである。この強い道徳的関心なしには、彼女は偉大な小説家になりえなかったであろう。

[注]

- 1 John Halperin, *The Life of Jane Austen*, The Harvester Press, 1984, p.69.
- 2 W. Somerset Maugham, *The Novels and Their Authors*, Penguin Books, 1969, p.66.
- 3 Percy Lubbock, *The Craft of Fiction*, Jonathan Cape, 1965, p.267.
- 4 *Pride and Prejudice*, edited by R.W.Chapman, Oxford University Press, 1965, p.11.

- 5 *Ibid.*, p.14.
- 6 Margaret Kennedy, *Jane Austen*, Arthur Baker, 1950, p.47.
- 7 S. T. Warner, *Jane Austen*, Longmans, Green & Co., 1961, p.10.
- 8 See E.M.Forster, *Aspects of the Novel*, Edward Arnold & Co., 1953, p.74.
- 9 Jenni Calder, *Women and Marriage in Victorian Fiction*, Thames and Hudson, 1976, pp.17-18.
- 10 *Pride and Prejudice*, p.5.
- 11 *Ibid.*, p.111.
- 12 *Ibid.*, p.113.
- 13 *Ibid.*, p.298.
- 14 *Ibid.*, p.306.
- 15 Earnest A. Baker, *The History of the English Novel*, Vol. VI, Barnes & Nobel, 1929, p.94.
- 16 *Pride and Prejudice*, p.236.
- 17 *Ibid.*, p.236.
- 18 *Ibid.*, p.283.
- 19 *Ibid.*, p.309.
- 20 See Waletr Allen, *The English Novel*, Pelican Books, 1958, p.109.
- 21 *Pride and Prejudice*, p.20.
- 22 *Ibid.*, p.22.
- 23 *Ibid.*, p.23.
- 24 *Ibid.*, p.122.
- 25 *Ibid.*, p.125.
- 26 *Ibid.*, p.64.
- 27 Ian Watt, *The Rise of the Novel*, University of California Press, 1964, p.297.
- 28 *Pride and Prejudice*, p.68.
- 29 *Ibid.*, p.68.
- 30 *Ibid.*, p.70.
- 31 *Ibid.*, p.71.
- 32 *Ibid.*, p.97.
- 33 *Ibid.*, p.105.
- 34 *Ibid.*, p.107.
- 35 *Ibid.*, p.108.

- 36 *Loc. cit.*
37 *Ibid.*, p.201.
38 *Ibid.*, p.76.
39 Edwin Muir, *The Structure of the Novel*, The Hogarth Press, 1954, pp.46-47.
40 *Pride and Prejudice*, p.78.
41 *Ibid.*, p.231.
42 *Ibid.*, p.233.
43 *Ibid.*, p.280.
44 *Ibid.*, p.310.
45 *Loc. cit.*
46 *Ibid.*, p.1499.
47 *Ibid.*, p.315.
48 *Loc. cit.*
49 *Ibid.*, p.387.
50 *Ibid.*, p.11.
51 *Ibid.*, p.14.
52 *Loc. cit.*
53 *Pride and Prejudice*, p.227.
54 *Ibid.*, pp.198-99.
55 See Mary Lascelles, *Jane Austen and Her Art*, Oxford University Press, 1963 p.161.
56 Edwin Muir, *op.cit.*, p.41.
57 See Edwin Muir *op.cit.*, p.45.
58 *Pride and Prejudice*, pp.11-12.
59 *Ibid.*, p.12.
60 See Andrew H. Wright, *Jane Austen's Novels: A Study in Structure*, Chatto & Windus, 1967, p.106.
61 *Pride and Prejudice*, p.10.
62 *Ibid.*, p.11.
63 *Ibid.*, p.23.
64 *Ibid.*, p.57.
65 See Edwin Muir, *op. cit.*, p.44.
66 *Pride and Prejudice*, p.369.
67 *Ibid.*, p.245.

- 68 *Ibid.*, p.246.
69 *Loc. cit.*
70 *Ibid.*, p.356.
71 *Ibid.*, p.358.
72 *Ibid.*, p.365.
73 山脇百合子『英国女流作家論』, 北星堂, 199, p.44.
74 Edwin Muir, *op. cit.*, pp.45-46.
75 Marvin Mudrick, *Jane Austen: Irony as Defense and Discovery*, Princeton University Press, 1952, p.94.
76 *Pride and Prejudice*, p.376.
77 *Ibid.*, p.373.
78 度会 好一著『ヴクトリア朝の性と結婚』, 中央公論社, 1997, p.60.
79 See Earnest A. Baker, *op. cit.*, p.93.
80 "Charlotte Brontë: 1848; 1850," *Critics on Jane Austen*, edited by Judith O'Neill, George Allen and Unwin, 1970, pp.6-7.
81 F. R. Leavis, *The Great Tradition*, Chatto & Windus, 1962, p.7.

北星学園大学文学部 北星論集第36号 正誤表

頁・行目	誤	正
44頁17行目	誰れ彼れ	だれかれ
51頁17行目	頭惱	頭腦
67頁16行目	[参考文献] テンニエス『ゲマインシャフ… 念—上・下』岩波書店… 大阪市立大学経済研究所…	[参考文献] テンニエス『ゲマインシャフ… 念—上・下』岩波書店… 大阪市立大学経済研究所編…
159頁(v)13行目	蓮葉図	蓮舟図
158頁(v) 1 行目		
150頁(v) 4 行目	天竜寺	天龍寺